

ないない尽くしの中で 作られているコメは!

お会いする前からかなり「すっ飛ば
んだおやじ」だろうとの思い込みは
あったが、実際はもつととんでもな
い人物だ。例えるとしたらH2ロケ
ットもしくはソユーズ並にお空にま
っすぐ目標を決め、空気に裂け目を
作りながら轟音とともに突き進む津
軽人といったところか。

「ウクライナで大豆を作ろう」で名
を馳せた青森・木村慎一さんには2
004年8月24日、北海道土を考え
る会夏季研修会が私の地元・長沼で
行われた時に、初めてお会いするこ
とになった。

昨年は第2回全国大会終了後に、
銀座にお伴させていただき、**あの
顔?** で銀座のおねーたま達にモ
テモテの術を学ぶことになった。こ
れって木村さんを褒めているのか?
ケナシテいるのか? その辺のこ
とを含めて本年8月に行われたウク
ライナ・モスクワツアーのご報告を
させていただく。

NHKでの数回の放送によるカラ
知識や木村さんとの何度かのやり取
りがあった「ウクライナってどこ?」
の会話から始まり、じゃ行ってみる
かな、と重い腰を上げるのに2年近
くが経過した。しかしウソはいけな

いので「それほどウク
ライナには興味はあり
ません」と木村さんに
は伝えておいたが、結
論から言うことやほり気
になる国であった。

ロシアに行くのには
ビザが必要なので、ソ
連の旧衛星国ウクライ
ナも同じであろうと思
っていたが、そうでは
なく単なる観光の場合
は口頭で何も聞かれる
こともなくスムーズに
入国できた。

氷河が大地を削り取
った北部の穀倉地帯
は、社会の教科書にも
出てくる有名な穀倉地帯である。今
回訪れた南の黒海に面したクリミア
半島は、海底の隆起で土地ができて、
現在は表土に見られる貝殻が、その
地球の歩みの面影として残ってい
る。

ある農場に視察に行き水田を視察
することになった。広大な面積であ
る。ツアー参加者が「収量はどのく
らいですか?」の問いに600kgと
言う数字が出てきた。全員「ほーす
ごい」と驚きの声を発したのには深
い訳があった。単位はhaつまり60kg
/10a。そうなんです、たったの

「GMにニエツト!」なんて 言わないウクライナの生産者

Vol.32



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、
大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代か
ら米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、
その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代
理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたこと
で、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

1反で1俵しか取れない
のです。そのことを示す資
料がある。肥料使用量は2
000年には14分の1、現
在では少し持ち直して3分
の1まで減ってしまっただ。
理由は何かと思えますか?
答える肥料をかうお金が
ない、水利費もマトモに払
えないので水田を増やせな
い、マトモに農薬を買えな
いので水田はいもち病にな
ってしまってもそのまま。
そしてコメ自給率は50%が

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

現状である。

その一方で、ある農場ではグリーンツーリズムをこれから積極的に取り入れて行くと言っていた。長沼でもやっていることと大体同じ様だ。都会の人を連れて来て農村を体験させる。違いはグリーンとツーリズムの間にRURALの文字が入っていた。

こんなことを聞いた。「AK47突撃銃を撃つことはグリーンツーリズムの範ちゅうですか?」。参加者全員から、「お前はバカか?」ビームを浴びせられたが、答えは意外にも「イノシシ狩りをライフルで撃つために育てています」と彼の地の人間には狩猟民族の血が流れていることが証明された。女性通訳は「ウクライナでは銃の規制が厳しいです」とは言っていたが、所変われば品変わる良い例である。では日本のグリーンツーリズムでは? 本物の銃を使えとまでは言わないが、忌避効果があるかもしれない赤色発光ダイオード銃でイノシシ退治をやるうと云う発想はないのだろうか。

ところが、畑を見ると、雑草が大豆が青々と!

木村さんは本年300haを超える面積の大豆栽培を契約したが、その農地の購入となると現実的に難し

いようだ。木村さんもお願ひしている弁護士事務所に行き、ウクライナの土地に関する法律を学ぶ機会があった。事務所の本部は地中海のキプロスで所長は元KGB職員だった。彼の話によると、あと3年くらいで土地の所有に関する法律ができることだ。では今は何も存在していないのだろうか。もし勝手に外国人が農地の借地契約を地元の者としたら、大変なことになる理由はそこにあった。しかし3年後、成長するウクライナに今の時点で触手を伸ばすことは案外、正解かもしれない。

こんな意地悪な質問もした。「知的所有権は存在しますか?」。所長からは、もしコピー商品を作ったり販売した者、それを分かって購入した者は賞罰の対象になりますと模範的な回答を得たが、後から通訳たちは「その辺でたくさん売っていますよ」と、当然こうなるだろうという発展途上国の模範的解答を得た。彼女たちは「コピーでもいいでしょ?」と言っていたが、私は「上手くいく人のマネは役に立つが、コピー商品を使っていたら偽りの人生を歩むことになりまます」とたしなめた。その後、木村さんが契約している大豆畑を視察したが、奇妙な風景に戸惑った。木村さんが契約している大豆畑には雑草がポツリポツリとあ

ったが、道路を挟んで隣の農家の大豆畑には雑草が一本もなかった。私は木村さんに「場所間違えていませんか?」と聞いてしまった。するとおったまげる言葉が。「隣はラウンドアップ耐性のGM大豆だよ」。ウ、ウクライナでGM? 腰が抜けそうになった。私は聞き直した。

「木村さん、ウクライナでGM大豆があるって言わなかったじゃないですか、それにNHK見ていたら普通の大豆に見えますよ」。木村さんは「だんれも聞いてくれなかったべし」。その瞬間、私にはこのおやじは津軽弁を話す完璧なウクライナ人に見えた。

確かにその通りではあるが、地元の農家にも聞いてみたところ、大豆の70%はGM、GMもNON・GMも大豆としての価格は同じであること、GM大豆の種子は地元の会社から購入しているが、元の種子は米国とカナダから来ているらしいこと、ラウンドアップは高いのでロシア製のジェネリックを使い、反当たり100ccを2回ほど散布するとか。

で、ここからが重要な話。「もう一度NON・GM大豆の栽培に戻りたいか?」の質問に地元の生産者たちは、はつきりと私の目を見ながら「ニエット」つまりノーの返事をした。これはまぎれもない事実で、日

本の将来をこの地で見ていることを忘れてはいけないと実感した。またある生産者はGMに関する法律はあるが、誰も規制することができないと云っていた。このウクライナの生産者に心からこれからも頑張っしてほしいと思ひ手を握りしめた。

まとめである。農地面積が日本の国土面積と同じ、人口は4000万(5000万との説もある)しかない。つまりオーストラリアの2倍の人口があっても農業が豊かではないのはなぜか。理由は簡単だ、政府に金がないからだ。予算として

の金がないから農業に再配分されることは期待できない。先進国ほど農業や農村が豊かになり私のような者が現れるのは、日本が豊かである証明でもある。いろいろな場面で、農業が豊かであることに対して、けんそうな顔を示す日本人が存在する。申し訳ないが、そんな人達が豊かになればなるほど、農村が豊かになるのは世界の流れである。

豊かな農村社会を潰すのは実に簡単なのだ。今以上に未来を信じられなくなり、可処分所得が下れば(下げれば)、生産者である我々は貧しくなるだろう。自分自身の未来を信じられるか。それとも農村の貧しさを取るか、選択は二つに一つだ。